

巻頭に寄せて

病院事業管理者 鈴木彦之

今年度より神経内科が新設され、標榜診療科も18となり、救急センター、老人性痴呆疾患センターをはじめ、関連各科の診療の質の向上は勿論、研修医の神経病学の修得に大きく資するものと期待されます。診療科の新設は市条例の改正を要することから今議会に諮られました。議会ではその趣旨を理解され議決されました。しかし同時に当院の狭隘化にも言及され、今後の病院の診療体制の展望も問われました。現況での神経内科の開設については、各科の協力を願うことが多いのですが、病院の今後の展望については、議会での諮問に待つ迄もなく、二十一世紀をみつめ、市民の医療ニーズの動向もふまえ、地域医療の中での当院の果たすべき機能を広い視野から、また自治体病院の立場から具体的に検討すべき問題であり、またその時期にきたものと考えます。

ところで、この五月平成七年版の厚生白書が刊行されました。今年初めて「医療」がテーマとして取り上げられたのですが、その中で「医療」はサービス業であると考えられ、白書のタイトルも「質・情報・選択そして納得」とし、今後の医療は医療技術の進展に支えられた医療サービスの「質」の向上に取り組み、患者や家族の「選択」の幅が「情報」に基づいて広がり、「納得」して治療は行われるべきとしています。要すれば患者・家族などの視点を重視し、患者とともに医療について考え、議論を深め、共通認識をもって発展させ、医療の質を高めようとする時代になったと分析しています。これは今年度の日本医学会総会でも、テーマに「人間性の医学と医療」を掲げ、多くの演題・シンポジウムが医学・医療での人間性・社会性の追求にさかれ、医療は単なる技術ではなく、哲学や倫理をふまえた社会的側面の対応が重要と強調されたことと軌を一にするものと思います。

顧みると、我々の日常診療のなかで当然として行なわれている何気ない行為の中に、患者の立場からみて、十分に満足・信頼がえられ、評価に応えるものかどうか、とくに研修教育病院として医師養成の責務を担う中では、職員一人一人が謙虚に考えていくべき問題と考えます。

ところで、今年も昨年に勝る論文を本誌に収載できました。相変わらず多忙な日常の診療、くわえて救急センターの診療に明け暮れる中で、とくに研修医ならびにレジデントの発表の多数みられることは喜びに絶えません。またこれに関わる各科の指導医の尽力に敬意を表するものです。臨床研究を論文にまとめるということは、多忙な毎日の診療のなかでは可成の努力を要しますが、発表することにより、多くの医師の考察を検証し、時にはその意見交換からより深い理解と新たな進歩発展が期待されます。とくに研修医にとっては、限られた症例の中から患者に学ぶという、医療の原点を身につける最良の方法であり、これはまた医師としての生涯教育に直結するものと考えます。また今回もコメディカルよりの発表も多数みられましたが、当院の医療技術の向上に直接つながるものとして評価され、今後の一層の研鑽を願ってやみません。